

されている。これらの先行研究との関連性や本書の位置づけについても、どこかで言及があったほうが良かったかもしれない。

次に、本書は中国の農業政策を論じた著作としては珍しく環境・資源問題もカバーしている。この点は中国農業の持続可能性を懸念する声が多いなか、読者のニーズに応えるものとして高く評価できる。そのうえであえて評者の要望を述べると、近年中国政府は本書で取り上げられている水や土壌などの資源制約の問題のみならず、農業に起因する環境汚染問題と農業廃棄物の循環利用についても非常に重視しており、環境規制の強化は農業と畜産の発展にも大きな影響を与えつつある。ないものねだりではあるが、第4章あるいは第6章あたりでこうした動きについても解説があれば、さらに本書の内容は充実したものとなったであろう。

以上、いくつか疑問点あるいは要望を述べたが、いずれにせよ本書は現在の中国農業の姿を丁寧に解説した良書であり、日本の読者にとって当該分野を学ぶうえで最新かつ良質の手引きとなるだろう。今後、本書が広く読まれることを期待している。

参考文献

日本語：

池上彰英・宝剣久俊編（2009）『中国農村改革と農業産業化』アジア経済研究所。

岡本信広編（2018）『中国の都市化と制度改革』アジア経済研究所。

宝剣久俊（2017）『産業化する中国農業—食料問題からアグリビジネスへ—』名古屋大学出版会。

山田 七絵（やまだ ななえ・
アジア経済研究所）

【書評】

アーサー・R・クローバー著

『チャイナ・エコノミー』

（白桃書房、2018年2月、xii+395ページ）

英文書名：China's Economy: What Everyone Needs to Know

英文著者名：KROEBER, Arthur R.

英文評者名：OKAMOTO, Nobuhiro

本書の日本語訳が出版されたことは大変喜ばしい。2016年4月に本書が出版されて以降、英語圏では非常に高評価で受け入れられた（例えば『ニューヨークタイムズ』2016年5月5日のインタビュー）。イギリスアマゾンでは11件のレビューで4.9星、アメリカアマゾンでは55件のレビューで4.7星である（2018年8月15日時点）。実際、クローバーは同年10月に評者が滞在していたSOAS（ロンドン大学東洋アフリカ学院）に招かれ、「China's Economy: Powerhouse, Menace or the Next Japan?」というタイトルで講演を行った（岡本2016）。講演では、本書と同じく中国経済を平易かつ客観的に見ようとする姿勢が表れており、評者は非常に好感を持った。評者はそれまでクローバーを知らなかったが、講演での分析が平易かつ分かりやすかったので本書を入手したが、この本が日本語訳になって、日本の読者に届くことを非常にうれしく思っている（原著が私の積読本として眠っていたことは内緒にしたいが）。

残念ながら日本アマゾンでの評価は2件のレビューで2.5星である。隣人として日本から中国のアジアでの振る舞いをみると客観的に中国を分析することをよしとしない風潮があるし、それが嫌中本の人気につながっていることもある。その意味では、日本人読者による否定的評価は、むしろ本書が英語圏の人間からみた「客観的分析」であることを示すものだといえる。

本書は入門書として現在の中国経済を見る上で網羅的かつ客観的に情報を得ることができるという意味で、日本人学生やビジネスマンに薦めたい一書である。中国経済に関連する一見幅広い多くのトピックをコンパクトながら相互に関連させつつ軽快な筆致で説明する。中国経済

を専門とする評者の目からみても、まず学生に読ませたいと思ったし、また日本の中国ウォッチャーも、「一般読者向けの平易な解説を目指した意欲作」（高口2018）と評しており、本書は中国経済に関する入門書として好意的な評価が定まりつつある。

アーサー・クローバーは、日本ではなじみがない。彼は1987年から2002年までジャーナリスト、民間エコノミストとしてキャリアを積み、2002年北京でドラゴノミクス（Dragonomics）という独立した民間のコンサルティング・調査会社の立ち上げにかかわっている。現在は、その創立パートナー・研究責任者であるとともに、ドラゴノミクスが刊行する China Economic Quarterly の編集長でもある。その他、コロンビア大学、ブルッキングス研究所等の客員を務めている。

本書は原著の副題「What everyone needs to know（我々が中国について知っておくべきこと）」にあるように、13章にわたってかなり幅広いトピックを扱っている。

- 第1章 中国の政治と経済
- 第2章 農業と土地と地方経済
- 第3章 工業と輸出経済の興隆
- 第4章 都市化とインフラ
- 第5章 企業制度
- 第6章 財政システムと中央・地方政府の関係
- 第7章 金融システム
- 第8章 エネルギーと環境
- 第9章 人口構成と労働市場
- 第10章 興隆する消費者経済
- 第11章 格差と腐敗
- 第12章 成長モデルを変える
- 第13章 中国と世界

本書の内容を紹介するにあたっては、本書がいかにか客観的かという観点から示してみたい。つまり、日本の一部の読者が抱く「中国の政治が混乱し、経済が崩壊に近づき、そして世界への影響力を弱める」という見方を念頭に、以下、政治混乱、経済崩壊、世界への影響という三つの観点から本書の内容をまとめてみよう。

①中国の政治モデルは長続きするのか？

クローバーは、中国の政治経済体制を一党支配による権威主義国家であり、地方は分権化されている、とする。しかし、問題は中国の現実がこの権威主義体制と力強い経済が両立することは難しいという歴史的経験に反していることだ。ロシアのように権威主義を強めると経済は崩壊するし、韓国のように経済成長を重視すると政治的には民主化されたものになってくる。

つまり中国は、「経済成長の最大化と権力の維持という二者択一のジレンマ」を抱えており、「どの程度のどんな形の経済成長を実現するために、中国指導部はどの程度のどんな種類の権力を犠牲にする用意があるか」という絶妙なバランスの上に立っていることは間違いない（第1章）。

中国は市場経済が進展した結果、格差と腐敗もひどくなっているのも事実である。

クローバーは都市住民の住宅私有化が都市住民と農民の格差につながったとみている。つまり、都市住民は工作单位（勤務先）から配給されていた住宅を安く買ってその後転売することで大きな収入を得ることが可能であった。これは国から都市住民への富の移転につながった（第2章、第4章）。

同時に汚職も計画経済から市場経済への転換（価格や関税の自由化）に伴う利ザヤ取りから、土地の取り上げという掠奪的なものに移行してきているとクローバーは指摘する（第11章）。

それではなぜ格差や腐敗が政治への不満につながっていないのだろう。一般的には「中国の権威主義的な政治制度によりあらゆる抗議行動はそれが広がる前に叩き潰される」と見ることも可能だ。

しかし、本書は①経済成長は所得を増加させてきたので、格差や腐敗が許容範囲内の副産物・副作用であったこと、②政策当局者は「過去15年間、一部の格差問題の解決のために、多くのエネルギーを注いできた」とともに、「改革への努力を結集するために、役人にある程度の汚職を認めていた」という（第11章）。それに消費を支え、政治的な意識が高くなる中間層の存在も「2億人から3億人、割合にして人口の15%から25%」しか存在せず（第10章）、「明確な変化を求めている」（第12章）ことを併

せ考えると、経済面での持続的な成功、1989年以降ほぼルール化された指導者の交代（政治的安定）と適度な汚職、各種調査で示される前向きな見通しは、「恐怖のあまり怒りを抑え込み限定させられている民衆、という単純な像とは一致しない。」とし、中国の一方支配体制は当面続くともみている。

また企業主体の徴税システムもこの体制を支えているとするのが、クローバー独自の見方だ。個人の直接税負担が小さいので、税金がどう使われているか市民が監視すること、すなわち、「中国政府が意図しているかどうかはさておいても政治活動の活発化を防いでいる」という（第6章）。

②中国の経済モデルはどうなっており、今後どうなるのか？

中国の経済発展モデルについて、クローバーは特に新しい視点を提示しているわけではないが、その分オーソドックスに発展モデルを整理している。まず東アジア（日本、韓国、台湾）の「発展志向型国家（ロバート・ウェイド）」に従い、中国は農地改革（第2章）、輸出型製造業（第3章）、金融抑制（第7章）によって発展してきたことを示し、その上で中国独自の特徴として、国有企業改革（第5章）と大量の海外直接投資（第3章）を指摘する。この分析は大部分の中国経済学者が同意するであろう。

この経済発展モデルについて、指摘されている課題も目新しくはないが、重要なものはきちんと網羅されている。整理すると、(1) 中国の技術力向上は目覚ましいが世界をけん引する技術が生まれていないこと（第3章）、(2) 大量のインフラ建設が成長をけん引したこと（第4章）、(3) 国有企業の生産性が低下してきていること（第5章）、である（第12章）。

中国企業は中国市場に適應するようなイノベーションには優れているが、新しいイノベーションを起こしているわけではない。一つの原因として、クローバーは皮肉にも中国の「自主创新」という政策にあると指摘する。それは「自主创新」が単純に輸入された製品やサービス、アイデアへの依存を減らそうとしていること（アイデアを国籍に閉じ込めない方がよい）、二つ目は社会が自由な意見交換を制限している

方向にあるからである（第3章）。

大量のインフラ建設は中国経済の資本ストックを増加させ、生産性の向上に貢献してきた。多少非効率であっても大量の資源投入は経済の成長に貢献してきた。しかしこの資本ストックの増加も限界が見え始め、効率的な運用を求められてくる（第12章）。いわゆる「量」から「質」への転換である。

国有企業については、推計によれば資産はGDPの177%であるが、GDPへの貢献は35%程度だという（ちなみに民間は60%、外資系企業が5%程度）。つまり「多くの資産を抱えている割には、GDPへの貢献度は低い」（第5章）。そして民間企業の総資産利益率（ROA）は上昇しているにもかかわらず、国有企業のそれは劇的に減少してきているのである（第12章）。

このような課題に対し、習近平政権はトップダウンによる改革プログラムによって経済がもっと市場の効率性によって動くことを目指し、一方で党の権力は強化されること、つまり「レーニン主義的資本主義」を目指しており、今後も数年間は有効だろうとしている（第12章）。

③中国は世界にどう影響を与えるのか？

先に述べたように原著の副題は、「我々が中国について知るべきこと」となっているが、日本語訳では「複雑で不透明な超大国 その見取り図と地政学へのインパクト」となっている。これは本書第13章「中国と世界」を意識したものである。

まず、経済的にアメリカを超えることがあったとしてもそれは不思議ではないし、驚くべきことではないとして、クローバーは「カギとなるのは単純な経済規模ではなく、技術力と政治的な力であること」と主張する。

技術力を見てみると、中国企業は「60%の価格で80%の品質」のビジネスモデルを採用しており、輸出構成でもハイテク輸出の70%は海外企業によって生産されたものだという。華為技術、アリババ、バイドゥなど有名な企業はあるが、それらは中国以外で開発されたモデルをもとに中国市場で海外ブランドよりも成功する製品やサービスを開発しているだけだと指摘する。つまり中国発のイノベーションがあつてそれが世界で幅広く採用され、真似されていないとい

う点からみると中国の技術力には疑問符がつく。

それでは政治力はどうか。確かに経済発展を背景に習近平政権は2013年以降政治力を拡大してきている。しかしクローバーは中国の政治力拡大の米国への影響については楽観的にみている。中国の政治力の拡大はアジアに限られておりそれもアジアから反発を受けていること（南沙諸島問題等）、他国とは経済的な関係を基本としていること（一帯一路等のインフラ外交）、インドと同じように軍隊を国境を越えて派遣していないことを理由にあげている。

もちろんアジアから見ると、このクローバーの見方は楽観的過ぎるかもしれない。問題は経済的な影響力（貿易や投資）が他国の安全保障に影響を与えうるからだ。すでに米国は中国からの輸入によって職が奪われているという見方が存在するし、一帯一路は他国への経済支配につながる点も指摘されている。

クローバーもこれらを認めつつ、人々とくに西側諸国が中国の台頭を恐れる、あるいはその影響力を恐れる理由についても考察している。（とくに米国が）中国を恐れる理由として、(1) 中国が独自の軍事力を持ち、どこの同盟に属することなく、独立した国家であること、(2) 中国が抑圧的な政治と経済成長を組み合わせることは可能であることを示すこと、つまり米国や西側諸国の好む価値観である自由市場の資本主義と代議制民主主義の組み合わせから外れる国が出てくること、だとクローバーは指摘する。後者は、2008年のリーマンショック以降議論されている北京コンセンサス、ワシントンコンセンサスの対立でもある。

最後に、本書の読み方について触れておこう。本書は、中国をあまり知らない学生や一般ビジネスマンに薦めたい一書である。思想的に嫌中/親中という対立軸から独立した客観的な情報が豊富だからである。ぜひ最初から読み通すことによって、幅広いながらも本稿で述べた三点を軸に中国を理解することができるだろう。

次に中国でビジネスをしている人、あるいは

ある程度中国と関わりのある人にとっては、中国についていろいろな疑問を持っていることだろう。本書の各章の節は皆が疑問に思いうテーマを節のタイトルにしている。例えば「中国経済が世界最大になったら何がおきるか」といった具合だ。目次から興味ある質問を探して、クローバーの回答を読むと、その問題の背景も含めて中国のことを理解することができる。

さらに中国ウォッチャーや研究者であれば、彼の仮説にツッコミをいれつつ読むのもよいだろう。先にも述べたように、格差の原因を都市部の住宅私有化に求めているところなどは、やや問題を簡単にしすぎているし、中国経済の将来や世界への影響がどうなるかといったものは想像でしかない。彼の仮説を検討すれば新たな研究テーマが見つかるかもしれないだろう。

いずれにせよ、本書は中国経済の入門書として非常によくまとまっているといえる。

<参考文献>

- 岡本信広 (2016) 「中国は脅威となるか」『岡本信広の教育研究ブログ』2016年10月16日
(<http://okmntbhr.seesaa.net/article/442896481.html>)
- 高口康太 (2018) 『「チャイナ・エコノミー」高口康太氏書評—幅広い分野を網羅し、中国経済の特徴を時間軸でも説明』白桃書房書籍フォローアップサイト
(<http://topic.hakutou.co.jp/china/archive/s/107>, 2018年8月1日アクセス)
- “Q. and A.: Arthur R. Kroeber on ‘China’s Economy’”, *The New York Times*, May 5, 2016
<https://www.nytimes.com/2016/05/06/world/asia/china-economy-kroeber.html>, 2018年8月15日アクセス)

岡本 信広 (おかもと のぶひろ・
大東文化大学)